ぼやき

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぼやき

【Ｎコード】
Ｎ９３９９Ｔ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
男がぼやいているだけ。

ずっとそこでぼんやりしている内に、陽が暮れてしまった。
さっきから、空間の亀裂から見知らぬ腕が俺を手招きしているから、死神だね、もうすぐ俺は死ぬのだと思う。だから動く意味も働く必要も無い。と心の中で呻いてみても現実問題、腹は減っている。省エネみたいな感じで動いていないつもりでも実際には動いているらしく、それは俺が決められることじゃなく、この身体全体の総意という奴で、心臓が一度も止まらないで動き続けることを望んでいるらしい。所詮俺は司令塔でしかなく、身体の全てをコントロールしているつもりでも、実際にはそれが出来ていないのだろう。脳味噌の俺。司令塔。でも心臓止められない。多分、こういう自己管理の出来ない人間だから女房にも逃げられるのね。イヤホンにも逃げられる。車にも逃げられる。自転車にも逃げられる。逃げられすぎ。そんなに俺が嫌なのか！
そう言えば。女房は『楽しくない』という、意味深かつ決定的に思える一言を、ぼろっちいテーブルの上に書き置いて俺と共に住んでいたアパートから姿を消失させたけど、出て行く時には鍵くらい掛けておいて欲しいものだ。泥棒が入ったらどうするんだ。セキュリティ甘々な一室に盗人が入り込んだら辛過ぎるだろう。きっと女房は泥棒にでも入られやがれという悪態でも付きながら唾を吐き捨てて血走った眼、他人が彼女を見たらひっくり返って泡を吹く、みたいな雰囲気を自重せずに垂れ流しながら実家へと帰ったのだろう。盗んだ車で。実家。笑えてくる。実家。あんな都会の片隅にあるぼろっちい実家に帰ってあいつは楽しめるというのか。ここで住むよりも。人ごみに塗れ、その人ごみの圧迫だけで押し潰れてしまうような無力のぺらっぺらなあいつに、都会の片隅でこじんまりとした実家。ははは。無理だろうに。こういう少し辺境でありつつも田舎とも言い難い、就職先もある程度あって住民の心も都会人よりは暖

かみがある、みたいな丁度良い住み心地の良い、ついでに俺もいるし、スーパーだってコンビニだってクラブだって温泉だってある、賑やかな商店街だってあるよ。こんなにバランス、いや均衡っていうのかな、が取れている市街から出て行って都会の片隅のこじんまりで落ち着いてどうするというのか。落ち着けないよ。何にもわかっていない女房だ。行き当たりばったりで自分の感情に従うあまりに他人に迷惑を掛けてしまうことに気が付けない阿呆な女房が俺の女房だったに違いあるまい。ふん自己中め。なんであんな女房と婚約関係を結んだというのか。今となってはありえない。というわけでもう呆れた。呆れ呆れ呆れ呆れレレレ。この話はもうよそう。気分が悪くなる。

気分が悪くなると言えば、二年間くらい使っていた高かったメタリックブルーのカナル型イヤホンを電車に置いてきてしまったのは俺自身が悪いのであるが、誰か親切で心の清い人間が落し物預かり所に届けてくれていないかなと期待してしまったのは俺が悪いだろうか。いや期待したのは俺自身なのだから俺が悪いのは考えるまでもないのが事実だろうが、しかし初めて会話をした駅員に「…あー無いです。無い無い。いやー、あなた、間抜けなことをしましたね、のび太並に間抜け。へへへへへへへへへへ」と期待していた心の僕を突き刺すようなことを言ってから笑う筋合いが君にあったのかね、おい？　どっかのお笑い芸人にあんなへへへへという笑い方をする奴がそういえばいた。がたいの良い、どすんどすん歩行する熊みたいなピンクの奴。すごい馬鹿にされてるみたいで腹が立ったよ！マグマみたいな怒りが噴火しそうになったみたいな感じになったよ！

俺はあの駅員さんに知らぬ間に屈辱を与えていたのだろうか。俺は何らかの復讐されたのでしょうか？まぁそういうことではあるまい。あの駅員の機嫌があまり良くなかったということだろう。俺は八つ当たりをされたのだ！ああ、何て不運なことだろう！駅員めぇぇぇぇ。

はぁ、とため息を付いても仕方が無い。陽も随分前に落ちてしま

ったことだし、むっくり草むらから起き上がることにする。青色のチェック柄Yシャツの背中側に細かな草がぱらぱらとくっ付いているだろうから、払い落として、その後にベージュのズボンに付いただろう草も払い落とす。ぱんぱんって気軽にね。俺はもう身軽さ。女房が実家に逃げ、イヤホンにも車にも自転車にも逃げられ、そして無職。自転車と車は盗まれたのだけどね。車は女房に。自転車は見知らぬらっきょう顔の餓鬼に。目の前で持ってかれてた。ぼーっとしてしまって、何故か追いかけられなかった。哀れ俺の自転車。せめて走って追いかけてやるべきだった。女房のことも追いかけてやった方がいいだろうか。まあ、あいつは追いかけなくても勝手に帰ってくるだろう。情動的な奴だから。自転車はそういうわけにもいかないのが困った所だね。本当困ったよ。近場しか行けないよ。夏で暑っいのに。

まあ問題はそこじゃない。問題は無職、そこにある。俺には仕事が与えられなくなってしまった。いらないよ、ぽい、ってされたのだが、俺が無能力だったんかい、それとも企業サイドが薄情だったのかい、それとも他の何かに原因があるのかい。知らんがまぁ、鬱々してても仕方があるまい、バイトでも何でもして、あわよくば俺も実家に帰っちゃったりして、ほいほい、ちょいと社会の荒波に揉まれて綿埃みたいになってしまった俺のマインドを落ち着かせなくちゃいかんぜよ、って感じが必要なのかもしれぬな？金はしばらくは大丈夫だし。

はぁ。にしても、きっとこういう独りよがりな性格というか、内向的で胸内でぐちぐち言ってる割に言葉数が少ない感じ、ってのが世の中的には少数派というか社会に求められていないんだろう。社交的で明るく、太陽みたいに明るく、周りの人に花のような香りをばら撒き、ミントの臭いがする吐息を紡ぎ、誰もがガハハと笑えるジョークを難なく発することの出来る感じが社会には求められているのであって、って、俺とはまったくもって真逆なタイプじゃないか。妬ましい……許せん……。

つっても自業自得だけどね。俺も明るい人の方が社会的に必要とされるってのは何となくわかるよ。だって暗い奴って話しかけ辛いし、話題提供してくれないし、何考えてるかわからないんだもの。やっぱね、社交的な性格ってのが正しい人間としてのあり方だと俺は思うね。暗い性格ってのは駄目よ。周囲まで黒く染めちゃうんだから。あ、だから俺は無職になったのだろうか。周りが俺の暗闇に侵されて黒く塗り潰されそうになったことに反旗を翻した。これによって俺はクビ。俺をクビにした皆は、社内を暗く染める元凶である俺が消失して歓喜。みんなでパーティーなんて開いてクラッカーをぱんぱん鳴らし、誰の誕生日でもないのにハッピーバースデー！とかお調子者が叫んで、まったく違うでしょう、なんて微笑ましそうにＯＬがツッコミを入れてから真剣な顔つきに変わってこう言う。「いやー、あの根暗が消えてくれてマジせいせいしたわ。失せろよな、ごみ」。いやあああああやめてくれって俺は一人、夜の中芝生の上で悶絶しそうになる。俺自身の妄想のせいで。

そういえば妄想ってのは非合理的な行為らしいね。確証も無いのに一つの考えに固執してしまったりというのは一種の病的な状態で、だから重度の妄想をしてしまう人間には休息が必要らしい。そう考えると今の俺には休息が必要であり、芝生で寝転ぶのではなく自宅の布団に包まることが先決なんじゃないか。芝生に寝転んでいるというのも、何かちょっと夜だと不審者っぽい。こういう不審者的行動を無意識な内にしてしまうというのは、俺が不審者になりつつある兆候なのではないだろうか。いや、既に……。いかん、自動販売機で飲み物でも買ってからアパートに帰って寝よう。不貞寝よう。昼過ぎくらいまでぐーすか寝よう！そのまま心臓が拍動することに飽きて永久の停止でもしてくれればいいのだけれど。

夜空に三日月。俺を嘲笑っているかのような曲折。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9399t/

ぼやき

2011年6月9日04時55分発行